

## まちを育む暮らしの役割

講演者：高田 光雄氏

## 【開催概要】

「まちを育む暮らしの役割」

日時：2010年6月29日(火) 15:30～16:30

会場：学士会館 202号室(東京都千代田区神田錦町3-28)

## 【講師プロフィール】

高田光雄氏

京都大学大学院 工学研究科教授。1951年生まれ、博士(工学)、一級建築士。

日本建築学会理事、都市住宅学会副会長、京都府建築審査会会長、京都市住宅審議会会長、大阪府住宅まちづくり審議会会長職務代理、舞鶴市都市計画審議会会長、京都府建築士会副会長、上町台地からまちを考える会理事などを務める。地域の歴史や文化を活かした住まい・まちづくりの実践的研究、少子高齢社会に対応した住まい・まちづくりと都心居住空間のデザイン、スケルトン・インフィル方式の住宅ストック再生への適用、集合住宅団地の再生、シナリオ・アプローチによる住まい・まちづくり計画手法の開発などに取り組む。

○主な著書(含共著)：『地域を活かすつながりのデザイン』(創元社/2009)、『体験!まちづくり学習』(学芸出版/2003)、『都心・まちなか・郊外の共生』(晃洋書房/2010)、『少子高齢社会の都市住宅学』(ミネルヴァ書房/2002)、『NEXT21:その設計スピリッツと居住実験10年の全貌』(エクスマレッジ/2005)、『現代住宅研究の変遷と展望』(丸善/2009)、『日本における集合住宅計画の変遷』(日本放送出版協会/1998)。

○主な計画作品：「泉北桃山台B団地」(堺市/1982)、「エステ南千里」(吹田市/1989)、「実験集合住宅NEXT21」(大阪市/1993)、「ふれつくすコート吉田」(東大阪市/1999)、「アーバンエクス三条」(京都市/2002)。

○主な受賞：日本建築学会賞(論文1996)、日本建築学会作品選奨(1996)、都市住宅学会賞(論文1998、論説2003/2005、著作2007)、日本不動産学会業績賞(2001)、日本計画行政学会計画賞(1995)、日本建築士会連合会賞(2001)、SB05 Best Paper Award(2005)など。

【目次】

講演記録「まちを育む暮らしの役割」

高田光雄氏 京都大学大学院工学研究科教授

はじめに

コミュニティの単位としての『町(ちょう)』

マンション紛争からみえた本当の課題

マンション紛争からはじまった協議からルールづくりへ

大阪―まちの複雑な形成過程とまちづくり

そもそも「まちづくり」とは

まちづくりの現代的課題

価値の共有

変化するまちづくりのリーダー像

「コモンズ」の議論

「コモンズ」の視点から見たまちづくりの検討

タイトでオープンなコモンズに向けて

ネットワーク型まちづくり活動としての「上町台地からまちを考える会」

情報発信からネットワークづくりへ



# 講演記録

講演

## 「まちを育む暮らしの役割

|| コモンズの視点から見たサステイナブル・コミュニティ・デザイン ||

京都大学大学院 工学研究科 教授

高田光雄氏

### ■はじめに

「まちを育む暮らしの役割」。これ実は事務局から頂いたお題なんです。大変難しいお題を頂いて、どうしたものかと考えたんですが、暮らしを、暮らしのルールであるとか、まちを運営するしくみであるとかそういうものと理解をして、私がこれまで関わってきましたまちづくり活動の中で考えてきたことを、お話させて頂ければと思います。副題に、「コモンズの視点から見たサステイナブル・コミュニティ・デザイン」持続可能なまちづくり」とございますが、後ほど、こういう観点で、こういう事をやってきたかという事をお話しする事になるかと思えます。

今日お話す内容なんですが、昨年、大阪の上町台地を現場に繰り広げられているまちづくり活動についての



講演をする高田光雄氏

様々な経験を、仲間と一緒に一冊の本にしました。その中の最終章を担当いたしましたして、その話をしようと思っ  
ているんです。

したがって、この場合のフィールドは大阪という事になります。ただ、この話は少し抽象的で、何でそんな事  
をやっているのか良くわからないと思われる可能性がある  
と思いますので、先に、私の出身であります京都での  
活動の話をさせて頂いて、その経験を踏まえて―必ずし  
も京都が先で大阪が後というわけでもないのですが、そ  
れとの関連の中で大阪の話をさせて頂ければと思いま  
す。

#### ■コミュニティの単位としての『町（ちょう）』

京都というと、関西によく来られる方とあまり来られ  
ない方とあるかと思いますが、京町家についての話題が  
ずっとこのところ出てきております。その事をご存知か  
と思えますが―京町家とは一体何かという議論をする  
またこれも一時間くらいかかるんじゃないかと思いま  
すが、少なくとも、京町家というものの捉え方として重要  
だと思われる事柄を最初に一つだけ言っておきたいと思

います。

町家というのは―もちろん、長屋建てのものもあるの  
ですが、京町家と一般に言われる表通りに面した町家は、  
一つ一つ独立した戸建住宅です。したがってそれは個人  
の家、私的な家なんです。しかしそれが連担する事に  
よって、まちができています。あるいは、逆に一つ一つの  
家が共同的なまちの要素になっている。こういう関係が  
ある事は非常に重要な事柄なんです。

この町家、あるいは京都のまちから学ぶまちづくりの  
知恵というものが、実は随分あると思っ  
ています。京都の町家の事を、あまりご存知ない方があろうかと思  
いますので、少しだけコミュニティのしくみをお話して  
おきたいと思えます。

「両側町」と書いていますが、京都のまちは、この航  
空写真のように上から見ると碁盤の目のようになってお  
ります。秀吉が碁盤の目の正方形街区の真ん中に、南北  
に道路を入れたところは、縦に細長い街区になっている  
所がありますが、いずれにせよ京都の都心部は正方形と  
長方形の街区が入り混じってできています。

いずれの街区でも、辻から辻まで、通りの両側に並ん

でいる敷地の集合が、一つの「町（ちょう）」と呼ばれています。なんとか町（ちょう）のように、町（まち）と書いて必ず町（ちょう）と呼ぶんですが、京都では、コミュニティの最小単位として今でも非常に重要な意味を持つております。江戸時代までは、この町が自治組織だったんですね。自分たちのまちを自分たちで管理運営するしくみだった。

各町には、「町式目」があつて、様々な暮らしの作法、ルールを共有しながらまちの運営を行っていました。こういういたしくみは、少し乱暴な言い方かも知れませんが、ちやうどイギリスの「コモンズ」と共通するような所があるんじゃないか。町は、町の共有地も少しは含まれますが、私有地の集合です。しかし、それも含めて町全体にコモンズ的な利用管理のしくみがある。「コモンズ」については後ほどもう少し詳しくお話をしたいと思います。

町は現在、自治組織ではありませんが、暮らしの作法、ルールを共有しながら様々な問題に対応するという取り組みを行っています。7月になると、京都の都心部では祇園祭が行われますが、山や鉾は町の単位で出すんで



京都の両側町



すね。

写真の真ん中に四ツ辻があります。その辻よりも向こ

うにある曳山を出しているところは向こうのお町内とい  
うこととなります。辻の手前はまた別のお町内というこ  
とになるわけです。



祇園祭の山鉾町

町がいくつか集まり、もう一つ上の単位である「元学区」という単位をつくります。明治2年に、全国で学制が施行される明治5年より前に、京都では町の集合体である町組が学校を建てたのですが、その単位が現在もコミュニティの単位として生きています。

こういうコミュニティの中で色んな都市問題が今までに起こってきました。特にバブルの後、京都の都心部ではマンションラッシュがおとずれます。その中でいわゆるマンション紛争があちこちで起こった。コミュニティにとっては、非常に大きな試練だったわけです。

■マンション紛争からみえた本当の課題

私は以前、住まい・まちづくり活動推進協議会会長の異先生の研究室の助手をしておりましたが、当時、研究室だけではなく、外部の専門家と一緒に、マンション紛争の研究を行いました。調査をやっています、マンション紛争の現場で私自身があれっと思つたことがございました。

マンション紛争というと普通は―特に京都の都心部で起こっているマンション紛争というのは、町家とマン

ションが闊つているんだと思われる方が多いかと思いません。新聞とか雑誌などのジャーナリズムもそのようにマンション紛争を捉えて報道してきたと思いますから、全国的にもそう理解されている。

しかしながら実際にマンション紛争の現場に入つてみると、どうもそうではない。少なくとも、それだけではない事が分かつてまいります。マンション紛争は、マンションのディベロッパーと地域の住民の間での争いだと、形の上ではそのように理解できると思うのですが、実際の問題はむしろ地域コミュニティの中にあるわけです。

マンション紛争の現場というのは、ほとんどの場合、地域コミュニティが揺ぎ、そこに亀裂が入り、地域の人同士がうまく関係を持ってない。あるいは相互に不信感を抱いたり、様々なコミュニティのトラブルが起こる。そしてどんどんどんどんコミュニティが解体していく。これがマンション紛争の実態だという事が、徐々に調査をやつていくと分かつてまいりました。

一方、すでに1990年以前から京都では、色んな方がマンションと町家の不調和が起こらないようにルール

を作ろうという活動を一生懸命やられていたんですね。しかし、非常に積極的に見えるまちづくりの現場に行つても、必ずしもポジティブな状況では無かつたわけです。

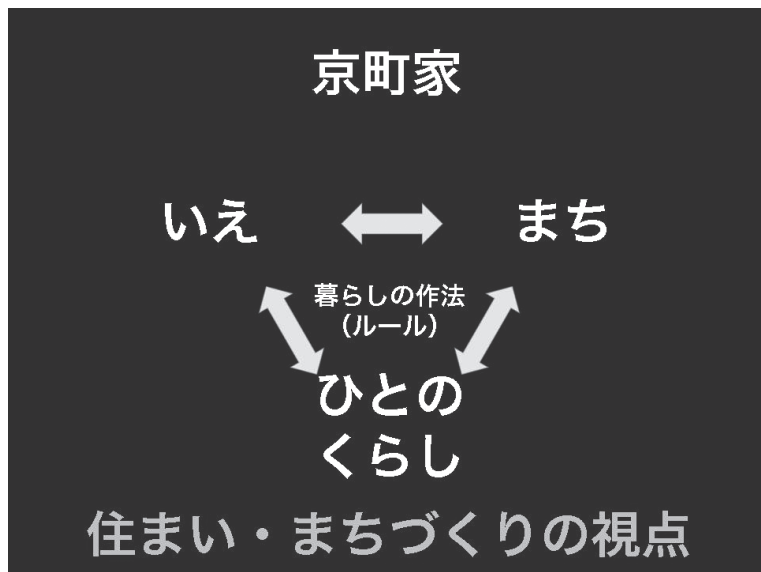
建築協定や地区計画を作ろうと運動されている方々の所に話を聞きに行くと、まちの将来を考へてその人個人の利害を離れ非常に一生懸命活動されている事が分かります。しかし活動のプロセスをずっと眺めていくと、やはりそこでも地域コミュニティの崩壊があるのです。亀裂が入つてばらばらになつていく。こういう所が少なくありませんでした。

ルール作りをしようという人たちが、一生懸命やればやるほど、どんどん地域のコミュニティから浮き上がつてくる。それに賛成する人と反対する人達がまた相互に不信感を抱き色んなトラブルが起こるんです。こうした調査研究をふまえて、これも巽先生を代表とする「町家型集合住宅研究会」という組織が作られました。

我々、建築が本業でありますから、この研究会では、色々な専門家とコラボレーションを行いながら、町家と共存できる集合住宅の開発を行い、その実践につとめました。その結果、いくつものモデル的な建物ができた経

緯があります。

しかしながら、こういうものは、マンションの全体量の中でいうとごく一部にとどまり、これがどンドン普及



住まい・まちづくりの視点

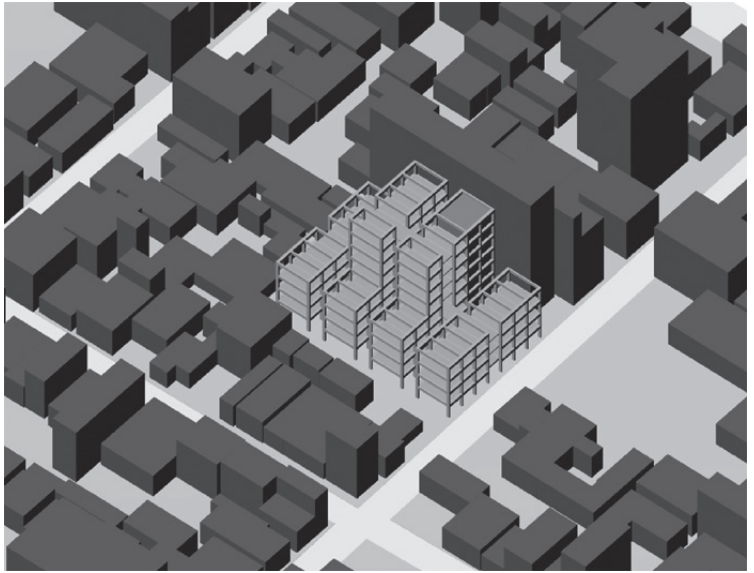
していく事にはなかなかならない。そしていくら建築を頑張っても、結局はマンションに住む人と、地域にもともと住んでいる人との関係がどうなのかが、地域にとつては大きな問題になります。

先ほど家とまちの関係が重要だと申しましたが、それに加えて、人々の暮らし、そして家とまちと暮らしを繋ぐ、「暮らしの作法」や、「ルール」の組み立てを考えないと、まちの将来像はなかなか見えてこない。

家とまちと暮らしの関係が、一旦ネガティブなサーキットに入っていくと、どんどんまずい方向に向かいます。しかし、必ずしも悲観的な方向だけとは限らない、ポジティブなサーキットを作ることができるという事も色々な経験から分かってきました。その例を紹介しましょう。

■マンション紛争からはじまった協議からルールづくりへ

20世紀の終わり頃に、現在「アーバンエクスプレス三條」（京都市中京区）というマンションが建っている所に、11階建ての分譲マンションの計画がありました。周辺住民の



アーバネックス三条

激しい反対運動にあつて、着工直前までいつていたんですが、その計画が白紙撤回されるという事がございました。

マンションの計画が白紙撤回されるという事は、いくらマンション紛争が激しくてもほとんどないんです。ごく少数、例外的な事例が都心部ではありましたが、そのうちの一つです。

一方、マンションの反対運動をしていた周辺の住民たちは、単なる反対運動にとどまらず、地域の歴史的、文化的資源を活かして日常の暮らしを豊かにする活動をはじめていました。

当時、京都では、「京都市景観まちづくりセンター」という財団法人が発足した直後で、ここが事務局になって、地域の住民とデイベロッパーとの協議の場を作つてはどうかという話が生まれてきました。といつても、これはそう簡単に実現する、あるいは話が進行するものではないです。相互に紛争の相手同士となる、地域の住民とデイベロッパーが、双方の信頼関係を作るのはなかなか難しい状況の中、「地域共生の土地利用検討会」で、協議が始まりました。したがつて、この土地をどのように活用するか、どのような建物をたてるか、という議論が最初からおこなえるわけがなかったのです。最初はまち歩きをしたり、地域の資源と暮らしを理解する活動

をしたりすることからはじめました。相互の価値観が当然違うわけですが、協議を少しずつ重ね徐々に立場の違いを越えた議論ができるようになりました。

そもそも最初から同じ目標に向かって議論をしていくのは難しい。それから先ほども言ったように、地域の住民も必ずしも同じ考え方ではない。むしろ地域住民の方に色々な考えの方、価値観の違う方がたくさんおられる中で、この土地の将来を考えなければならぬ。

また、ここは民間の用地ですから、きちつとした事業が成立しなければいけない。そもそもこういう協議のアウトプットとして、解があるかないかすら分からない状態で、議論が進行しているわけです。事業として成り立つとともに、まちにとってプラスになるような土地利用のあり方は何かという難問を価値観の異なる人々で解かなければならぬわけです。

しかしある時期をこえると、地域の住民の人たちの話ですが、どうすればここで事業が成り立つようにできるのか、という事業性の問題になってきます。そのとき、ディベロッパーの方が一生懸命考えておられる事柄は、どのようにしてまちの将来に貢献できるかという事なので

す。都心居住文化の蓄積の結果かもしれませんが、メンバーの方々のレベルが高かったこともあり、そういう議論に徐々になってきました。

一年をこえたところから、実際の土地利用について、具体的な提案、協議ができる状況になってきて、模型やCGなど色々なものを使って、土地利用のあり方を考えていきました。相隣関係に配慮してこの敷地だけの建物配置の最適解を考えるとよりは、どうするとこのまちの将来像に調和した土地利用になるのかを議論する事が、結局は事業者にとっても周辺住民にとつてもいいことがわかっていきます。

参加している人たちは、このマンションのごく周辺に住む住民だけではなくて、かなり広い範囲から色々な方々が参加して意見を交わす。当然住民の方々は、立場も違えば価値観も違います。そういう議論を積み重ねながら、最終的にある方向が見出されたという事がございました。普通のマンションとは様子が違いますけれども、立体的に町家を積み重ねたような建物ができ上がりました。

こういう協議を通じて学んだ事は、異なる価値観が存

在する時に、それらを対立的に考えて何とかしようとしてもこれはどうしようもない。まず異なる価値観であるという、その事自体を認め合う場がないと、協議は成り立たない、という事が非常にはつきりしてまいりました。そしてこれまでの事、あるいは現在のことを協議すると――これは価値観が違うわけですから、確実に一致しないわけですね。協議すればするほど違いが明確になってくる。

しかし、あきらめるのはまだ早いのです。唯一、将来の事、これからのまちをどうしていくか、という事については、異なる価値観の人同士が協議をして、少なくとも議論ができるという事が――本当は当たり前前の事かもしれませんが、分かつてきました。さらに、このプロジェクトでは、協議の仕方、プロセスを工夫する事で、そこに何らかのルール、方向性を見出し、そして、異なる価値観を超えて価値の共有にいたる場合があるのだ、という事を経験したわけです。

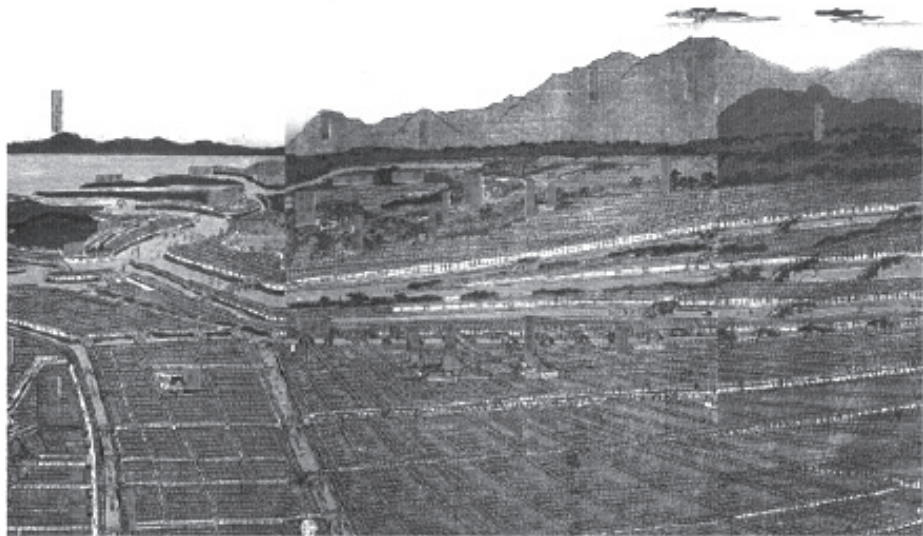
当時、京都市で「まちなみ審議会（京都市都心部のまちなみ保全・再生に係る審議会）」が公開で開かれていて、そこでこの協議のプロセスがちょうどリアルタイムで報

告されました。それを反映した議論を行い、急速な変化を止めるための規制強化と地域ルールづくりのためのまちづくり支援を内容とする提言を行いました。2003年に「京都市都心部の新しい建築ルール」ができます。

これは、実質的なダウンゾーニングを行うもので、京都市の条例の中では画期的なものでした（これは「2003年ルール」と呼ばれています）。その後2006年に「景観審議会（時を超え光輝く京都の景観づくり審議会）」が開かれて――ここからは皆さんよくご存知だと思いますが、景観法施行後の「京都市新景観政策」というのが始まりました。これは2007年の建築ルールになるのですが、その踏み台となったのが2003年のルールだったのです。京都では、マンション紛争が数多く起こり、その中で協議が行われ、様々な学習の場が生まれ、徐々にこういったルール作りができるようになったと思います。こういう事を理解して頂いて大阪の話をさせて頂きたいと思います。

#### ■大阪―まちの複雑な形成過程とまちづくり

京都も大阪も、歴史都市だという意味では、ほとんど



「近世大坂の都市部を描いた木版画」(部分: 大阪市立住まいのミュージアム・大阪くらしの今昔館所蔵)

変わりはないともいえるわけです。「難波宮」の建設から都市居住の歴史が始まったと考えれば、大阪のまちはむしろ京都よりも先に都市居住の経験も積み重ねていたといえる。いずれにしても京都や大阪は、古くからある都市として、人が住むまちとして、色々な経験が積み重ねられてきたまちです。

この絵は木版画で—実はもつと横に長いんですけども、江戸時代の終わり頃の大坂(現在の大阪)の都心部の様子を描いたものです。大坂の都心部が、整然とした木造の2階建ての建物で埋め尽くされている様子がよく分かります。次に「摂津名所図絵」などを使ってさらに近くで見るとこれも京都と同じように町家がずらつと両側に並んでいて、色んな商売が展開されていたことが分かります。ただ、大阪は京都に比べると、借家の割合がもつと高かった。

それで、建物としては戸建の町家よりも、長屋建てのものが多かった。当時の様子(長屋建ての建物)は、京都だと現代のまちな中に残っているのですが、大阪は戦災で木造の建物がほとんど焼失しています。しかし、こういった江戸時代の街並みを実物大で再現した「住まい

のミュージアム・大阪くらしの今昔館』（大阪市北区）というものがございます。

こういうまちが、どういいうしくみで運営されていたか。これは、先ほど申し上げた京都の両側町ですね、通りの両側に家が自治組織をつくっていた。その運営を担っているのは持家の人たちなんですね。

持家の人が町の運営を担う。協議をする場合は、「町会所」あるいは「町家（ちょういえ）」という共同の家があるんです。ここで協議をしながら、「町式目」という町のルールを作って運営していた。大坂も少し形態は違いますが、同じように「両側町」という形式で、都市の構造、骨格ができていた。ただ、京都よりもっと合理的なまちの作り方になっています。街区の中に無駄が少ないといえますか、あるいは道路と宅地の関係がより合理的にできているといえますか、しかし、両側町のしくみは（京都と）全く一緒です。

通りの両側の各家が町というコミュニティを作っていて、町会所を持ち、町式目を定めて運営されている。京都の場合は現在までこのコミュニティが続いているんですが、大阪の都心部は、近代化の中で工業、商業の占め



近世大阪の両側町（大阪市立住まいのミュージアム・大阪くらしの今昔館所蔵）

る割合がさらに高くなり、居住機能が徐々に後退するとともに、戦災によって住宅そのものがほとんど焼失している。都心から少し離れた所の戦前長屋は残っているの

ですが、都心の木造住宅はほとんど焼失している。そして現在の土地利用は商業が大変多くを占めています。京都ももちろんそうなのですが、京都は居住機能が都心にずーつと残っています。大阪も東京に比べれば、都心が小さく、かつその周辺に住宅が存在します。

しかし、大阪で都心に住むということは—最近でこそ大阪で大きな課題として都心居住が言われるようになりましたが、かつては環境の問題も含めて色々な困難がありました。そしていったん人が住まなくなつた所にもう一度、都心回帰で人が帰ってきてても、そう簡単に地域社会が構築できるわけではない。大阪の都心のまちづくりは、京都よりもある意味ではずつと難しいように思います。

こういった大阪の都心のまちづくりは、一体どうしたら良いかが課題としてあるわけです。

■そもそも「まちづくり」とは

「まちづくり」ってそもそも一体何でしょうか、議論の大前提として考えなければなりません。

「まちづくり」は、今、日本では本当にあちこちに出てくる言葉になりましたけども、実はよく分か

らない言葉なんですね。英語にすると「Community Development」とか「Community Design」とか。最近では「Community Management」という訳をあてる事もあると思いますが、英語圏の人たちが、逆に「Machizukuri」と、アルファベットでまちづくりを表現する事もあるようです。それほど日本のまちづくりというのはある意味で難解です—今日の演題にはコミュニケーションと書いてありますが、必ずしもこういう概念とは完全に一致しない。独特の内容を含んだ、しかも非常に意味が広い、広がりがある言葉として使われています。人によってさまざまに使われ方をするので概念が安定しないとも言えます。そのため、権威ある辞書には、「まちづくり」という言葉は、ずつと掲載されてきませんでした。

ところが、2008年、岩波の『広辞苑』（第六版）の中に「まちづくり」という言葉が初めて登場します。『広辞苑』の第五版までは、「まちづくり」という言葉はありません。どうして無いかというと、「まちづくり」という言葉は確かに良く使われているけれど、その意味はもの凄く広範で、特定の共通の意味があるとなかなか理

解しにくかったためと思われまふ。しかし第六版では、『広辞苑』は、「まちづくり」という用語を掲載して、ここにあるような2つの解釈を示しています。

一 番目、これは歴史的な「まちづくり」という言葉の使い方に言及しています。「まちの家並み」と書いてあります。井原西鶴の「本朝二十不孝」という浮世草紙の中に「まちづくり」という言葉が出てまいります。「まちづくりも次第にさびしくなりぬ」。これはどういふ情景かといひますと、都心から郊外の方にとんとん歩いて行くと、家が建て詰まっている所から、だんだんまばらになっていく。こういう様子を表現しているのですね。

したがってこれは現在、我々が使っているまちづくりというよりも、いわゆる「家並み」の事ですね。だんだん家並みがまばらになっていく情景を描いている事になります。

二 番目の方が、むしろ今の我々の使っているまちづくりに近いのかなと読んでみますと、「行政が行う総合的な市街地の整備・開発」と書いてあります。これはちよつとショッピングな定義ですね。さらに、「住民が主体となつて行うものという。」と続きます。これには反発す

る方も多いかも知れませぬ。

しかし現実には『広辞苑』の通りで、今の日本の社会で、「まちづくり」という言葉を、どこが一番使っているかといひますと、圧倒的に行政なんですね。「まちづくり」という言葉はもとと住民が主体的に行う活動の事を言っていたはずなんです——1960年代に名古屋で生まれ、当時は「街づくり」と書いていたようですが、その後、行政が行う都市計画に対抗する概念として「まちづくり」という言葉は使われてきました。しかし、ある時期から、行政がこの言葉を使うようになり、現在ではそれは確実に行政用語になってきています。

したがって、現実には日本に氾濫している「まちづくり」という言葉は、『広辞苑』が定義しているような意味なんです。しかしながら、私がここで「まちづくり」と呼ぶのは必ずしもそういう事ではなく、住民が主体となつて行う活動の方をまちづくりと言いたいと思います。そこで「まちづくり」をもう少し厳密に定義しておく必要があるかと思ひます。

## ■まちづくりの現代的課題

ここでは「地域資源の共同利用管理のしくみづくりに関わる活動」と、一応まちづくりを定義しておきたいと思います。重要なのは、地域の資源、共同的な利用管理という概念と想っておりますが、平たく言う则自分達のまちは、自分達でつくり育てる、あるいは守り育てるという活動を「まちづくり」と呼びたいと思います。今日お集まりの皆さんはおおむねそういうように「まちづくり」という言葉を理解し使つてこられているんだと思いますけれども、いずれにせよ住民が共同に行う活動に関わる概念になると思います。

「まちづくり」の現代的な課題はたくさんあると思いますが、一番根本的な問題は、先ほど申しましたような地域の中で色々な価値観の人がいることです。今までずっと住んでいる人と、新しくマンションに入つてきた人とは価値観が違ふ、というのはごく一部の話であつて、今まで住んでいた人の中でもやっぱり価値観は違つてゐるのですね。そして大阪をベースに考えると、京都のように激しくマンション紛争が起つてゐるわけではないけれども、たくさんさんのマンションが建ち、一方で低層の

多様な住宅に住んでおられる方もたくさんゐる。そういう人たちを集合として捉えると、価値観の違いというのは、京都よりも場合によつてはもつと大きな幅があるかもしれないと思います。

こういう人達がお互いにその価値観を認めるといふ事が大変難しい事柄で、ここをまず突破しないと、まちづくりの活動はできないと考えています。その場合に、これまで色々な活動の経験からするとよく話し合ひましよう、協議しましようという事がいわれます。確かに協議することは大変重要です。

しかし、価値観の違いは、協議したからといつて段々歩み寄るとは限らない。むしろ、価値観の違いがよりはつきりしてきて、あなたと私は違ふんだという事が分かつてくる。それを調整して、妥協点を見出す事で、本当にポジティブなまちづくりができるのかどうか、私は様々な現場で疑問に思つてきました。価値の調整というのは限界があるように思ひます。

## ■価値の共有

しかしながら、一つだけ限界を乗り越える可能性があ

るな、というふうに思うんですね。それは、現在から過去の事を言うと、価値観が違えば当然違う話になるのですが、未来の事、これからのまちの事の議論においては、価値観の違う人同士が協議をして新たな価値観をそこで発見していくという事があり得るんですね。「あり得る」という事だけで、できるかどうかは分からない。分かりませんが、その可能性がある、少なくともその協議が成り立つという事が大事なのです。ですから、まちの将来像を描くという事はまちづくりにとつて大変重要です。これを「価値の共有」と呼びたいと思います。

「価値の共有」というプロセスは、決してでき上がり図を描くものではないんですね。むしろでき上がり図を一つに決めるとなると、また価値の調整が必要になってくる。そうじゃなくて様々な未来、様々な将来があるんだ、という事を含めてどういう選択肢を考えなければならぬかを、より具体的に考えていく。複数のシナリオを共有しながら、それらを選択する条件を検討するので。これが「価値の共有」の実際のプロセスだと思っています。これを「価値共有過程」と呼びたいと思います。

「コモンズ」としてのまちの将来像が、「価値共有過程」

の中で生まれる。そういう協議が成り立つ環境ができれば、ポジティブなサーキットが回り始める可能性があるんじゃないかと思ってるわけです。

こういうことを、どういう現場で私が感じているかという事を次にお話ししたいと思います。先ほどまちづくりの概念が非常に多様だと言いましたけれども、住民主体のまちづくりと言っても、時間の流れの中でその内容はどんどん変わってきている。そして多様化してきていると思います。

#### ■変化するまちづくりのリーダー像

私が学生の頃に、「まちづくり」という言葉が非常に流行ったんですね。その当時の「まちづくり」という概念は、明らかに何か地域の問題があつて、それを解決するために強力な牽引型のリーダーがおられて、多くの場合、大変立派な方で、たくさんの人たちがそのリーダーの言説に賛同し、価値観を一つにしてリーダーの指導にもとづいて問題を解決していく。こういう活動が「まちづくり」と言われていたと思います。様々な建築紛争、あるいは都市の紛争、住民が参加して何かをつくるとい

う活動についても「まちづくり」という言葉が使われてきました。多くの場合こういう形態をとっていたと思います。

保存運動もそうですね。牽引型のリーダーの方がおられて、それを壊されないようにするという一つの目標に向って、力を合わせて活動していくのが「まちづくり」だったと思います。これを「20世紀型まちづくり」と呼んでおきたいと思います。

しかし現代の先進的なまちづくりの現場に行くと、必ずしも当面何をしなければならぬか、という事が明確になっていく訳ではない場合が多いのです。しかし色々な活動が活発に行われてきている。そしてメンバーには、色々な価値観の人がいる。その色々な価値観の人たちを、一つにまとめようというんじゃなくて、それぞれの価値観を尊重しながら地域社会を運営していく、というような支援型のリーダーがおられる。こういうところが新しいタイプのまちづくり活動の現場であるように思います。これを「21世紀型まちづくり」と呼びたいと思います。そういうところでは、短期的に解決しなければならぬ問題があるわけではない。しかし、長期的に見る

と、色々な課題を抱えているわけです。

たとえば、高齢者のケア、あるいは子育て支援を一体どうするんだということもあります。防災とか減災、あるいは防犯の問題、伝統行事の継承など、色々な課題があります。環境の問題もそうですね。活動の幅は非常に広がってきてはいるんだけど、今その活動をしなればその地域が壊れてしまうかというところ必ずしもそうではない。しかし放っておくと大変なことになるというタイプのまちづくり活動だと思います。

こういう21世紀型の―ちよつと乱暴な言い方ですが、その活動現場というのは、確実に多様な価値観を、相互に認め合っていると思います。まちづくりを必要とする地域の問題の構造が変わってきているわけですね。そして当面、目の前にぶら下がっている問題を解決するといふよりも、活動を継続させて、中長期的な課題にいかに対応できるか、という事が大事になっているのだと思います。だから現代のまちづくりの課題は持続可能性だといえるのではないのでしょうか。

次にこういう状況をふまえて、まちづくりと「コモンズ」という概念との関係を考えてみたいと思います。

## ■「コモンズ」の議論

「コモンズ」という言葉がよく使われるようになったのは、ハーディン (Garrett Hardin) さんというアメリカの生物学者が「コモンズの悲劇 (The Tragedy of the Commons)」(1968年) という論文をサイエンス誌に書き、非常にセンセーショナルな議論を巻き起こしたことによります。

ハーディンさんが使っている「コモンズ」という言葉は「オープンアクセス」という誰でも自由に入れる土地のことを指していて、正確なコモンズ概念ではないという批判がありますが、ハーディンさんが言っている事は、共有地は必然的に荒廃していく、共同所有の土地というのはだめで、私的な所有にするか、それがどうしてもできないのならルールを決めて公的な所有にするべきだという事なんです。

たとえばある牧草地を、複数の牧夫が放牧地として利用しているとします。そして牧夫のAさんは、家畜を飼っていて、その家畜が草を食べると、利益を得ます。しかしながら、草が無くなるわけですから、それに相当する損失があるわけです。それはAさんだけが負担するわけ

ではなくて、ここを利用している全ての牧夫たちも等しく負担をしているという事になる。こういう原理が、基本的に共有地の中にはあるんだとハーディンさんは考えたわけです。

そうすると、Aさんは、たくさん家畜を飼えば飼うほど、利益が増えていくという事になります。同じことはBさんにもCさんにもDさんにも言える事で、みんながこういうふう放牧をし始めると、最終的には放牧地が枯渇してしまふ。つまり悲劇が起こる。こういう原理が共有地にはあるんだという事を指摘して、私有化ないしそれができなければ公的に管理をするべきだという事を主張した。「コモンズの悲劇」は人口問題が深刻化する社会の中で一定の説得力があり、また、冷戦下の国際社会にも大きな影響を与えました。現在の地球環境問題などを想定すると、こういう考え方があてはまっているようにも見えます。

しかし、ハーディンさんの論文では、コモンズ概念の規定が明確ではなかった事があって、この指摘には様々な批判が浴びせられました。

地球環境というのはグローバルなコモンズですが、こ

こで取り上げているのはローカルなコモンズです。まず、それらを混同してはならない。そして、そもそもは、コモンズという概念はローカルな概念なんです。中世の特定の地域、イングランドとかウエールズの共同的管理のシステムの事を元々はコモンズと言っていたわけですが、それがモデルとしても使われるようになった。普遍的なモデルになっていったのですが、世界中にあるローカルコモンズというのは、必ずしも悲劇に陥っているわけではない。実際のローカルコモンズというのは、資源があつて、その資源を管理する制度、ルールがあるわけです。そのルールが上手く運用されている場合に、コモンズが成立していると考えerわけです。ハーディンさんの指摘のように、管理制度が無いものをコモンズと呼ぶのはそもそもおかしいとなつてくるわけです。

そういう持続可能な資源管理のしくみを、詳細な調査を通じて明らかにした研究者が何人もおられるんですが、その中でも、特に昨年のノーベル経済学賞を受賞されたオストロム (Elinor Ostrom) さんは、この悲劇の起らないコモンズのしくみについて非常に重要な研究成果を発信されてきました。ステイブンプソンさん、バー

クスさんなど、他にも色んな研究者がおられます。

このコモンズ研究者の一人である農学者、東京大学の井上真さんの概念などをお借りして、まちづくりとの関係を考えてきたいと思います。

#### ■「コモンズ」の視点から見たまちづくりの検討

まちには共同で使われている重要な資源がある。まちそのものが資源だ、というように考えてもいい。そしてこれを、たとえば江戸時代の自治組織であった「両側町」のようなしくみで管理運営するとなると、まちをコモンズだと考える事ができる。

この場合、特定の人を利用するので、まちは閉じたコモンズ、クローズドなコモンズだと考えられます。利用者が特定され、町式目のようなルールがあり、きちっと管理されたコモンズ、つまりタイトなコモンズであれば、悲劇は起らないというのが、コモンズ論の理屈なんです。この考え方が、果たして現代の地域のまちづくりの問題にも適用できるかどうかということになります。

実際には、なかなかこれは難しいですね。自分達のまちは自分達だけで守り育てることができるとか、そ

んなしくみができるのか、それができたとしても持続可能性があるのかと考える。たとえば高齢者のケアの問題とか、防災とか減災の問題ですね。防犯の問題や子育ての問題、色んな地域の問題を、地域社会の住民の共同的な取り組みによつて解いていけるのかということ、大都市の中では、なかなか難しいということになる。

しかしながら、これであきらめてしまわないで、住民の共同的な活動の可能性を少しでも探っていこうではないか、というのがコモンズの視点から見たまちづくりの検討という事になるんですね。

まず「コモンズ」を、資源の管理運営の制度、しくみだとした上で、次にそのしくみを考えたいと思います。江戸時代の「町」のようなしくみでだけで現在の課題に対応するのはほとんど難しいだろう。京都でも、結局、「町」という組織の中だけで、たとえばマンシヨン問題を解決したという事は無かつたわけです。

これに対して、クローズドな、閉じたコモンズとして考えないで、ルールをきちつと決めるけれど、開かれた組織として、地域の共同の資源を管理運営していくというしくみができないだろうか、つまり、タイトでオープン

ンなコモンズという議論がありえるわけです。

先ほどお話しした京都の事例は、実はこういうしくみの中でポジティブなサーキットが動き始めている。そういう実証例も無いことは無いのですね。タイトつていうのは、ルールがきちつと決まっているという事です。オープンと言うのは、その地域の住民以外の人たちが、その地域のまちづくり活動に参加しているという事です。

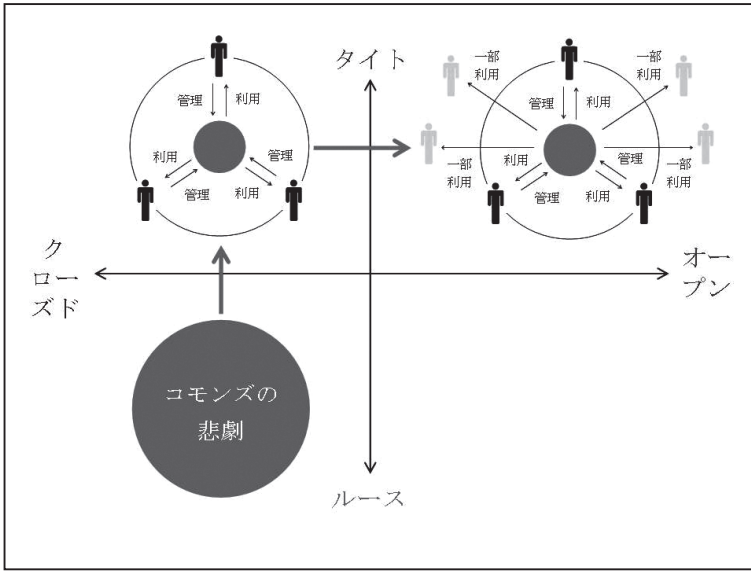
地域外から参加しているのは、単にその人が好きで参加しているとか利用しているという事ではなく、何らかの役割とリスクを背負って参加しているという事になります。こういうしくみを、地域で育てられるのではないかと、いくつかの現場での経験から考えています。連携のしくみとしてのタイトでオープンなコモンズが実現できないかという事です、この原理を少し簡略化して説明したいと思います。

#### ■タイトでオープンなコモンズに向けて

地域の活動主体だけで、色々な課題に対応するのは難しいことがあると思いますが、明確な役割を認識し、それなりのリスクを負担する外部の支援主体を含めて組織

を作るとうまくいくことがあります。

これはどうしてか、なんです、地域の活動主体は、それぞれも価値観が違います。外部の支援主体は価値観



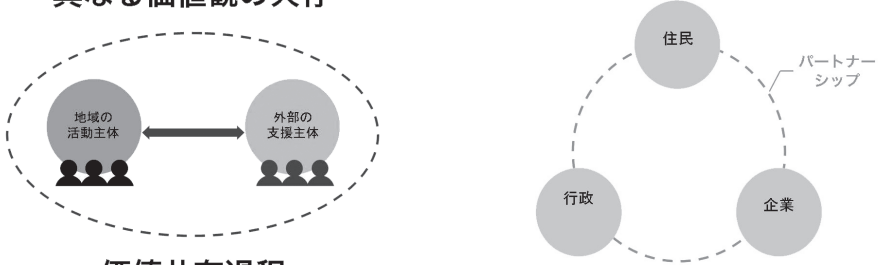
タイトでオープンなコモンズとまちづくり

がもつと違います。もし、そういう価値観の違いを相互に認め合う事ができなければ活動そのものが成り立たないわけですね。したがって地域のクロードな組織の場合は一こういう異なる価値観、多様な価値観が共存する事が必ずしも前提ではないのですが、オープンな組織形態の中でまちづくり活動が行われる場合は、多様な価値観の共存が、まず前提条件となります。

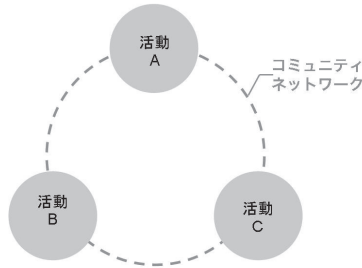
一旦、そのように地域の取り組みが始まると、外部の価値観の違う主体との連携は、大変やり易くなってきました。住民が企業や行政と連携をして「パートナーシップ」とよく言われますけれども、そういう活動が、よりやり易い状況が出てきます。その結果としてポジティブなサーキットが生まれることがある、ということになります。同じような事が、他の活動団体との関係の中でも生まれます。自組織内の異なる価値観との共存が他団体との関係づくりに寄与するのです。これを「コミュニケーション・ネットワーク」と呼んでいます。

よく、同じ目的を達成するためのNPO同士は仲が悪いという話がありますけれど、それは、それぞれが閉じたコミュニティになってしまっているからです。しかし

## 異なる価値観の共存



## 価値共有過程



その一つ一つの活動団体が、何らかの開いた組織運営をしていると、相互に連携しながらより大きな目標を達成する、あるいは価値の共有を行う、そういう活動がしやすくなっています。

共同的な都心居住の支援のしくみを作ろうと思うと、今のような原理がはたらく取り組みをしなければならぬという思いが大阪の上町台地で行ってきた活動のベールにあつたわけです。

■「ネットワーク型まちづくり活動としての「上町台地からまちを考える会」

上町台地というのは、大阪城から南のほうにずっと延びている台地で、大阪では環境条件の大変いい所です。

ここは、古代から政治や軍事、交通の要所になってきました。「難波宮」や「四天王寺」ができました、「石山本願寺」ができました、現代でも多くの史跡があるとともに、「難波宮」の跡地の整備などが進んでいます。もちろん大阪城もごさいます。また、上町台地は、大阪の都心でどんどん住むところが縮小していても、比較的人々が居住し続けてきた所だと思って頂いたらよいと思います。

す。

この上町台地のご真ん中に、かつて都市基盤整備公団、今のUR（都市再生機構）がまだ公団の時に、ここを都心居住の拠点にしようというプロジェクトがあつて、5年間くらい、拠点整備の構想の議論をした事がありません。

この時、単に建物をどうするかという事だけではなく、地域のまちづくりの拠点にすることが重要だという議論をしました。都心居住の支援を、都心で活動している様々な団体のネットワークの中で実現していく。その活動拠点を、計画地の中に作っていくという構想があつて、実際に上町台地周辺で活動しているグループに集まって頂いて、連携の可能性を検討しました。活発な議論が積み重ねられ、多くの提案が行われました。

ところが、ちょうどその頃から公団は、こういう提案的な事をやっていくのが難しくなり、最終的にはこの土地を民間に売却する事になってしまい、都心居住の支援の拠点を作る構想も無くなってしまいました。

しかし、この時に集まってもらったまちづくり活動のグループというのは「大阪の都心居住を支える」という

視点からみると大変先駆的な活動を行っているグループでした。なんとかこのネットワークを活かして、プロジェクトも拠点も無くなるんだけど、拠点を散らばらしてもいいから、構想を実現し、活動自体を継続したいと考えるようになったんですね。それが、「上町台地からまちを考える会」という会の発足の背景であります。

そして会自体は、当初コミュニティシンクタンクとして様々な調査研究をしたり、情報発信をしたり、色々な助成も頂きながら活動をして、「まちの学校」とか「アートツーリズム」とか、「アートマンスリー」とか、「上町台地100人のチカラ!」、これは今でも続いています。あるいは地域資源のデータベースづくり。色んな活動を、このグループでやってまいりました。その中心となっているのは、空堀とコリアタウン、そして下寺町という3つの拠点地域で、それぞれ非常に先進的なまちづくり活動が行われてきた所です。

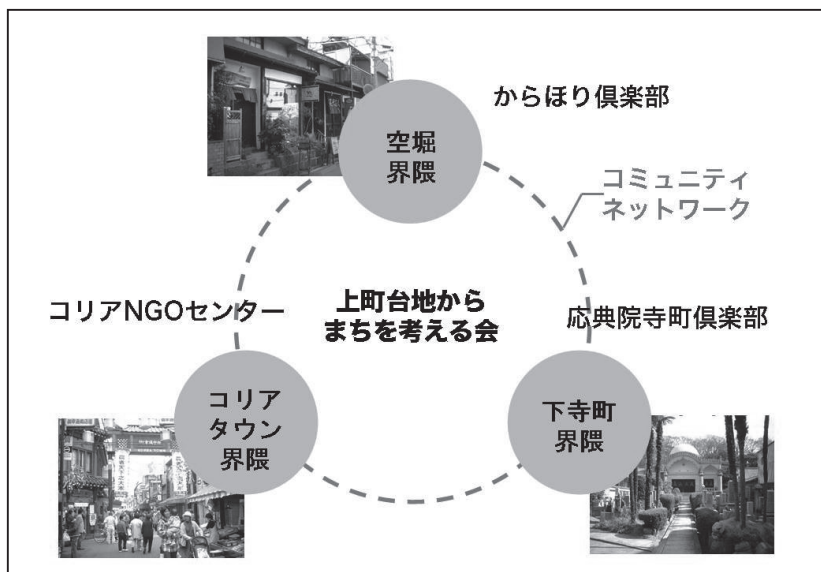
空堀界限は、戦前の長屋など古い建物を再生、活用しながらコミュニティを再生していくという取り組みを行っています。入居者やテナントの交流を重視し、「からほりまちアート」などのイベントを通じて、活動を点

から線、面に展開しています。

生野区のコリアタウンは、在日コリアンの方がたくさん住んでおられるところですが、コリアタウン界隈を中心に—もともとは人権運動から始まっているのですが、近年では修学旅行生の受け入れ等も含めて多文化共生のまちづくりを非常に活発に行っています。

下寺町は、お寺がたくさん並んでいる所なんですけど、お寺の活動をベースにしなから、お寺であるという事を活かした実に多様な文化的活動を精力的に展開し、また、演劇活動が盛んな地域性を反映して若手の舞台芸術家の育成などにも継続的に取り組んでいます。

「考える会」は、こういう拠点を繋ぐことにより各地域の活動をより活性化するとともに、多面的な大阪のまちの魅力を発信する活動を行ってきました。これが『地域を活かすつながりのデザイン』（上町台地コミュニティ・デザイン研究会編、創元社、2009年）という先ほど紹介した本です。表紙は実は上町台地の地図になっています、こういう人がネットワークされているとか、あるいはこういうプラットフォームになっているという事を説明しています。3つの拠点地域のネットワークの中で、



上町台地からまちを考える会

色々な事が見えてきます。

この「考える会」自身も、3拠点地域で活動している

主体に、外部の支援主体が関わって、実際の事業を行ってききました。もともと、初期の目的をある程度達成した時点において、会としての事業を、どんどん拡大していくのが良いのか、という議論が出てきています。現在は、先ほどお見せした活動を、拠点地域の活動に重点を置くような形で展開をして、会としての活動は最小限にしています。



上町台地コミュニティ・デザイン研究会（編）『地域を活かす つながりのデザイン』（創元社、2009）

しかし一方で、地域同士の連携という意味では、やはり年々連携が深まってきていて、色んな意味でポジティブなサーキットが生まれてきています。人と場所とがつながる中で、色んなコミュニティのネットワークができるのですが、それを通じて、結局は人と人同士がつながっていく。そしてさらに新たなネットワークが生まれるというようなことが年を追うごとにできています。

#### ■情報発信からネットワークづくりへ

地域資源を上手く整理し、新しい都心居住者にその情報を紹介して、まちづくりの担い手を広げていこうというのも、この会としては当初から取り組んで来たことなんでしょうね。

一つは、「上町台地・cotocoto」(<http://nemachi.cotocoto.jp/>)と「上町台地・cotocoto+」(<http://nemachi.cotocoto.jp/plus/>)というのがあります。

地域資源のデータベースを随分前から作って発信してきました。しかし、必然性が無いと、なかなかアクセスできない。そこで、イベントのポータルサイトと結びつけて情報発信をし、都心居住者に提供するようにしたわ

けです。先ほどお見せしたような色々な活動のネットワークのどこかに引つかかってもらおうというわけです。

しかしそういったネット上の情報提供だけでは限界もある。これは、「上町台地からまちを考える会」そのものの活動ではないのですが、そのメンバーの方が中心になって、「考える会」と連携を取りながらやっている「U-CoRo」（上町台地コミュニケーションルーム）というプロジェクトです。

これは先ほどのようなネット上のものじゃなくて、もつと具体的な即物的な情報発信で、「NEXT21」という実験集合住宅の一階に設置されています。会議室の窓ガラスの所を展示場にして、ここで色々なテーマで情報発信をするんですね。

たとえば「減災」というテーマで展示をします。防災、減災に関わる地域住民の人たち、専門家の方々に参加をして頂いて、これまでの体験を語って頂いたり、関連する写真とか物品を持ち寄って展示をする。あるいは減災に関連する活動を色んな地域でやって、その活動の成果を展示するというのをやるわけです。その活動



実験集合住宅 NEXT21 の「U-CoRo」

自体がコミュニティを育てるんですね。

また3ヶ月ごとにテーマが変わって、ちょうどこの写

真に写っているのは、大阪の伝統野菜の展示なんです。ね。伝統野菜を育てようとか、これを使って様々な料理を作って食べようという事がこの時期は行われています。先ほどの減災をやる時に参加する地域住民の方と、この伝統野菜の時に出てくる住民の方は違っている。テーマを変えながら展示を通じた人のネットワークづくりをやることによって、ネットの情報ではなかなか拾えない人の場作りが現実になってきているという事があります。

そしてまた、先ほどの3拠点地域の活動は、それぞれの地域の中だけでなく他地域にも展開し始めています。新たなネットワークが広がってきているわけですね。

一方で、上町台地上の多様な地域のまちづくり活動に対して、行政も支援すべきであると考えられるようになって、2006年に「上町台地マイルドHOPENゾーン協議会」が大阪市のバックアップで設立されました。

これは「考える会」をモデルとしているのですが、3拠点地域の連携ではなく、上町台地周辺のたくさんの方の活動団体、住民組織、さらに学校とかお寺とか神社とか、あるいは企業とか、そういうものも含めて、ネットワークを作っていくって、地域のまちづくりを総合的に育成す

るしくみをつくろうとするものです。これも、もちろん多様な価値観の共存が前提の活動です。

この協議会が本場に活発に動き出すと、ある意味では「考える会」の役割は終わるんじゃないかと思われませんが、まだまだ色々な問題があります。今後、この協議会がそれらの問題を解決しながら、ポジティブなサーキットをつくっていくって欲しいと思いますし、その担い手も現れてきています。

最後に、もう一度今日お話した事を整理します。まちづくりには、多様な価値観を認め合うという事が大前提となる。その上で、まちの将来像をよく協議するという事が非常に重要である。その中で価値の共有というプロセスが生まれてくる可能性がある。ここに期待をしたいと思います。そして組織論的には、タイトでオープンなコモンズの構築を目指す中で、連携を通じた持続可能性の獲得が必要ではないかというような事をお話した次第であります。

ご清聴ありがとうございました。

画像提供：8～9p、11～12p、25～26p、28～30p 高田光雄氏  
15～16p 大阪市立住まいのミュージアム・大阪くらしの今昔館

この冊子は、一般社団法人住まい・まちづくり担い手支援機構が「長期優良住宅等推進環境整備事業に係る事務事業」（国土交通省の補助事業）の一環として実施した講演会「まちを育む暮らしの役割」の内容を取りまとめたものであり、実施にあたっては住まい・まちづくり活動推進協議会の協力を得た。

## 講演会「まちを育む暮らしの役割」記録

発行日	平成 23 年 1 月 17 日
編集・発行	一般社団法人住まい・まちづくり担い手支援機構 〒 107-0052 東京都港区赤坂 1-5-11 新虎ノ門ビル 5 階 TEL.03-3588-7799 E-mail:info@s-m-ninaite-shien.jp
協力	住まい・まちづくり活動推進協議会 〒 107-0052 東京都港区赤坂 1-5-11 新虎ノ門ビル 5 階 財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団内 TEL.03-3586-4869 E-mail:office@aih.jp